「愛顔（えがお）あふれる愛媛づくり」

令和元年度「知事とみんなの愛顔（えがお）でトーク」知事講話

開催日時：元.9.4(水)
開催場所：松山大学

皆さん、こんにちは。今日は「愛顔でトーク」に皆さんも大変多忙な日々を送っていると思いますけども、時間を割いていただき参加をしていただきましたことを感謝申し上げたいと思います。

こうした「愛顔でトーク」というのは、毎年７月から９月くらいにかけて、地域で言えば東予や中予や南予のエリアにおきまして、それぞれの地域で活躍をされている社会人の方々を対象に毎年意見交換をするということを積み重ねてきました。３年前から、さらに若い人達のアイデアなんかを県政に活用できないかなということで、３年前からは高校生とのトーク、それから大学生とのトークを取り入れさせていただきまして今回で３回目ということになりますんで、まあこの機会が、県がどんな事をやっているかということを皆さんに知っていただく機会でもあり、かつまた、皆さんがこんな事をやったらどうかというような若者ならではのアイデアを県に聞かせていただくような機会でもあり、完全なフリーディスカッションなんで僕も何にも用意してませんので、限られた時間ですけれど、どうぞよろしくお願い申し上げたいと思います。

【県の仕事と財政状況】

県の仕事というのは、皆さんからお預かりしている税金を活用して、例えば防災・減災対策であるとか、観光振興であるとか、経済活性化であるとか、福祉問題であるとか、教育問題であるとか、環境政策であるとか、多分野にわたって同時並行して全般的な運営するというのが仕事になってます。

この 10 年間は大きな課題を抱えていました。それは、皆さんもご案内のとおり国の財政事情が非常に将来見通しがつかない状況にありまして、国債発行残高が 800 兆円を超えて、政府短期証券や借入金も含めますと 1,000 兆円を超える借金を抱えているという状況になっております。こういう中で、これまでは国が何もかも政策を決めてそれぞれの分野の政策、提示された政策の中から各都道府県や市町村は身の丈に合ったメニューを選択するというメニュー選択型行政というのが１つの仕事のありようでありました。これは戦後ずっと続いてきた形態なんですけども、この形態は、地方からすればそんなに考えなくてもいいから楽な面もあります。しかしその一方で、オリジナルな政策、裁量権がないが故にオリジナルな政策を打ち出すことができないという悩みを抱えていました。

【地方分権】

国のほうは余裕がなくなってきたんで地方のことは地方で考えてほしいということで、財政事情の面から地方に権限や財源を移譲するという地方分権を提唱し始めている。時を同じくして、地方側からは積極的な視点から個性的なその地域の文化や歴史、自然環境等々を活用したまちづくりを自分たちがあくまでも考えてやっていくんだという気概を見つけ

るために、権限や財源を地方に移してほしいという真逆のスタンスから、地方分権というゴールが見えてきたというのがこの 10 年でありました。もちろん、まだ途上の段階でありますから、十分な移譲が行われたわけではありませんけれども、少なくとも 10 年の間に、地方自治体のありようというのは、今後もさらに変わっていかざるを得なくなってきております。

それはメニュー選択型の行政から政策立案型の行政体へと脱皮をするということであります。このことを受けて、この 10 年間愛媛県庁では、例えば組織の展開、改革あるいは人事評価制度の改革等々に着手をいたしまして、それぞれの分野が程よく競争し合いながら未来のオリジナルを描いてやっていこうというような体質に変わってきた段階を迎えています。

【通信技術の発展―５Ｇ時代を迎えて―】

ところが、これから皆さんが社会に出ていく時期を迎えると思いますけれど、これから５年、10 年というのはさらなる激変というのが待っているように思えてなりません。ここ 20 年の間に通信技術、ＩＴ技術等々の発展によって世の中は大きく変わりました。それは人々のライフスタイルを変え、価値観を変え、そして産業構造にも変化をもたらすというようなとてつもない変革を世界中にもたらしたということも言えるのではないかと思います。

例えば、1990 年に本当にこの時、1985 年にインターネットが世界に広まっていき、90 年代から無線通信という技術が入ってきて、まだそれから二十数年しか経っていません。しかしその間、皆さんが当たり前のように活用しているスマホ等々はすでに第４世代を迎え、これまで２Ｇから３Ｇそして４Ｇと移り変わってきて、その時ごとに、例えばスマートフォンが登場したりアプリケーションの市場が生まれたり、とにかく写真の業界が様変わりしたりという、産業革命を起こしてきました。その中で、たかだか十数年で世界のトップ企業に成長するような例も多く出てきたわけであります。

そして、いよいよ今年から来年にかけて、５Ｇ、第５世代の通信技術が世界中に広まっていくことになります。４Ｇまでと違って、ただ単にソフトが速くなる、あるいは容量が増えるだけでなくて、今回の５Ｇは、そこに通信による遅延が大幅に改善されたり、多重に同時に接続ができるようになるということを考えると、まさにＡＩ等々をフル活用した新たな分野というのが待っているということになろうかと思います。

いわばこれまで以上に産業革命というものが起こり得る可能性を持っている。あくまでも、今の段階では可能性としか言えません。５Ｇの性能ということについては多くの方々が受け止めているのですが、じゃあそれを、どの分野、どう活用していくかという答えはまだ見えていないというのが現段階であります。

県庁におきましても、若手を中心に、この５Ｇを活用して一体何が起こるのか、医療・福祉の分野でどうなんだろう、あるいは観光の分野でどう活用するのか、教育の分野ではどうなんだとか、環境の分野ではどうなんだ、経済活性化の分野ではどうなるのか、防災減災対策の問題ではどう生かせるのか、それぞれがグランドデザインを描くという作業を今している最中であります。

こうしたような大きな変化にプラスして、今、皆さんご存じのとおり世界情勢が混沌としている状況にあります。アメリカと中国の貿易戦争、そしてまた韓国と日本の問題、さ

らには中東情勢等々を見る時に、非常にこれは不透明な、不透明感というのが世界中を覆い尽くしているような感があります。

【人口減少と社会保障制度の現況と課題】

日本の国はもともと四方を海に囲まれていて、食糧も資源もエネルギーもない国でありますから、これまでは加工貿易立国として発展を遂げてきました。しかしどちらかと言えば、上場企業を中心とした展開でそれは成り立っていたんだけれども、これから日本国内はですね、ちょっと想像もつかないハードル、試練に立ち向かわなければなりません。それは少子高齢化に伴う人口減少という問題であります。この人口減少というのは２つの大きな検討要因を我々の前に提示します。

１つは、ピラミット型の人口構造で成立していた日本の国の社会保障制度というのが根幹から崩れ去る、とまでは言いませんけれど、成り立たなくなってしまうという問題です。社会保障制度改革というのは保険制度であり、医療制度であり、介護制度であり、様々な分野に大きな変革をもたらすことになるでしょう。

そしてもう１つは、人口減少ということは、これほどまでのスピードで人口が減っていく少子高齢化を迎える経験をした国は世界史上ないんですね。未知の世界だと思います。特に日本国内だけをみた場合に、人口減少、今１億 2,000 万人ちょっと人口がいますけれど、あと 30 年もすれば１億を割って 9,000 万を割るという時期も来るであろうという想定が出ています。もちろんこれは何も手を打たなかった場合でありますけれども、となると国内のマーケットというものが縮小する、という初めての試練が立ちはだかることになります。マーケットが小さくなるということは、去年と同じことをやっていてもどんどん尻すぼみになっていく、という市場が生まれてしまうということになります。となると、ローカルの立場であってもその地域の経済発展を考えた場合に、積極的に海を渡り海外に出かけ勝負をしていく。新たな市場を積極的にローカルからもチャレンジして開拓していくという必要性に迫られることになると思います。

（国際化）

まさに皆さんの時代は、我々の時代以上にこうした国際化という問題、地方にいてもそこに向き合わざるを得ないというような大変革が待っているということであります。例えば、福祉の分野ではそんなん関係ないじゃないかとなるかもしれませんが、今年、先日中国に行ってきました。中国も少子高齢化が進んでいて、日本ほど介護制度ができていない国でありますけれども、深刻な問題なんだと。これはぜひ協力してその人材養成、日本のほうが進んでいるんで、人材養成、こちらは人が足りないということで確保したい、向こうはその経験を通じてスキルを上げたいという、ここが合致しまして、中国のある地域との間で介護人材の育成をタイアップしてやろうということを決めてきたところでありますけれども、事々左様にあらゆる分野で国際化という問題が、新たな課題として浮上してくるんではなかろうかと思います。

（高度情報化社会）

まあそういう中で、大学生活の最前線で迎えている皆さんがまた考えられることもあると思いますんで、ぜひ、皆さんのアイデアも提供していただければと思います。情報というものは便利なものです。僕は大学を卒業した後は総合商社というところに勤めていまして、貿易の仕事で世界を転々としていました。ただし、その頃は通信手段が電話とファク

シミリとテレックスのみでありました。まだインターネットはないですね。こいう環境の下での貿易というのは、時差というのをうまく活用しながらビジネスをしたり、限られた情報をいち早くキャッチしたところがビジネスの世界で成長したという環境だったんです。でも考えてみると、今、インターネットやＩＴの普及によって、世界中どこにいても誰でもが情報がキャッチできる機会を手にする時代に入りました。一方で、氾濫しすぎている情報から的確な情報をキャッチアップする、セレクトするスキルというものも求められてきているところでもあります。

最近買い物なんかしてますとね、例えばスマホで買い物していると、まあＡＩが作動するんでしょう、その買っていく人の好みに応じて、それに類似するような商品情報がどんどん送られてくる。いやあ随分便利になったもんだなあというふうに感じます。しかしこの便利さの一方で失うものもあるのではないかなあということを考えます。それは、その情報の怖さであります。例えば、今日あそこの記者席に新聞記者の皆さんおいでますけれども、新聞やテレビというものは情報を提供する時に、必ず第三者委員会っていうのがあって、そこでこれは偏り過ぎているんじゃないの、これは本質的な裏付けがないんじゃないかというフィルターがかかるようになっていて、ですから多少の主張の違いはあれども、そのフィルターが監視機能を果たしてきちっとした情報が提供されるというのが長く続いてきました。しかし、例えば今の２つの話、好みのものがどんどん送られてくる。そして、フィルターがないというインターネットの世界でのニュースというのはどうなんでしょう。ある問題に関心を持ってるとして、ちょっとそれが偏った場合、それは商品と同じようにＡＩが判断して、その系統の情報だけがスマホに送られてくるようになります。しかもその中にはフィルターのかかってないのがいっぱいありますから、根拠がなかったり、ただ単にアジテーションのために指示された情報であったり、こういったものだけの情報に触れるようになると、公正な判断力とか情報というのがなくなっていくという可能性が出てきてしまう。

これは情報リテラシーの問題だと思いますけれども、こういうところまで考えないといけない時代になってくるのかなあということを、最近スマホを眺めながらつくづく感じていたところであります。

今日は皆さんの世代が若いですから、僕も、もう考えてみると学生生活というのは 40 年ぐらい前になりますんで、随分ギャップがあるかもしれませんが、可能な限り自分も最新の情報を得るという努力する日々を積み重ねていますので、まあ本当に楽しい議論ができることを期待して、ちょうど時間がまいりましたのでご挨拶とさせていただきます。

今日はどうぞよろしくお願いいたします。